史學雜誌

唐代前半期の四川
——律令制支配と豪族層との関係を中心として——
……松井秀一…1

研究ノート

伝会津蒲生氏領邑鑑の考証……伊東多三郎…38
いわゆる布引丸事件について……黒羽茂…51

資料紹介

ウィグル語訳金光明最勝王経……護雅夫…66

学界動向

アメリカにおけるロシア史研究（二）……外川継男…82

批評と紹介

駒井和愛・吉田章一郎共著
「斐太—新潟県新井市の弥生聚落址—」……清水潤三…97
ワルター・ハイシヒ著「仏典蒙訳史の研究」……岡田英弘…102

学界消息
会告
史学文献目録

第71編 第9号

史學會
東京大學文學部内

属せぬものなのである。そののちさらに、この同じ(1)・(2)の両章は、マーロフによってロシア語に翻訳せられ、かれの Pamyatniki drevnetyurkskoj pis'mennosti, Teksty i issledovaniya, Moskva-Leningrad, 1951 の中で(10) 'Pamyatniki buddijskogo soderžaniya (仏教的内容の文書)の一つとして、それぞれ発られ表せるにいたつた。

私はここで、上掲のサアデト、マーロフ両氏、とくに、私が最近閲読するを得たサアデト女史の業績をも考慮しつつ、レニングラード版金光明最勝王経を紹介したいと思う。これが、私がいま、ウィグル語訳金光明最勝王経の大体について、紹介しようと考えるにいたつた第二の理由である。

二、入手の経過

マーロフがレニングラード版および「仏教的内容の文書」に附した序文に記しているところによると(11)、本経の入手経過は、ほぼ以下の如くであるという。すなわち、マーロフは、一九〇九―一九一一年に、ロシアの「中央アジア・東アジア研究委員会」から派遣せられて、東トルキスタン・甘粛省で言語調査に従事していたとき、粛州附近の一中国人村落の郊外にある新しい洞窟寺院で、無用無益のガラクタとして、無秩序におかれている古文書の中から、二三五葉のウィグル文書を発見し(一九一〇年五月三日)、ついで、一三二葉を李定邦から(同年一〇月二七日)、さらに三〇葉を廷棟から(同年一二月一二日)、それぞれ手に入れた。研究の結果、これら合計三九七葉におよぶウィグル文書の大部分が、金光明最勝王経のウィグル語訳、つまり、altun ögüg yaruq yaltriglïγ qopda körtülmiš nom 金 色ある、光 明ある、すべてに まきれる、経 iligi atï(I)γ nom bitig の王 という名の 経 典 に属することが明かになつたのである。

ところが、同じくウィグル語訳金光明最勝王経の別の版本は、プロシアのトゥルファン探検隊によつて発見せられて、今日、ベルリンのアカデミーに蔵せられており(12)、その一部は、ミュラー(Müller, F. W. K.)(13)、およびバング(Bang, W.)・ガバイン(Gabain, A. von)(14)によつて翻訳せられたが、このいわばベルリン版とレニングラード版とのあいだには、言語的にも、内容的にも、また写経の時期にも、若干の相異があるようである(15)。

三、ウィグル語への翻訳者と、その訳経の時期・原語

レニングラード版ウィグル語訳金光明最勝王経の翻訳は、少くとも三人の人物によつて行われたもののようである。さきにものべたように、本経の第一巻(序 [suu])には、本来、金光明最勝王経には属さない金光明経懺悔滅罪伝がいれられているが、それにつづいて、同じ巻に、(1) tört m(a)ζarañč t(a)γrïlar (四人の maharāja [大王]-天、「四天王」)に対する讃と、(2) säkiz ulug orunlardaqï čaγïlar (八つの偉大なる地に在る caitya [霊塔]、「八大聖地制多」)に対する讃 (ögüt) とが掲げられている。この二つの讃は、これらと同じ、または似た形ではサンスクリット語本や(16)、

資料紹介

ウィグル語訳金光明最勝王経

護雅夫

一、はしがき

ここに紹介しようとするのは、ラドロフ (Radlov, V. V.)、マーロフ (Malov, S. E.) の手で、Suvarṇaprabhāsa (Sutra zolotogo bleska), Tekst ujgurskoj redakcii, Sanktpeterburg, 1913 (Bibliotheca Buddhica XVII) として、ウィグル文字の活字のまで出版せられたウィグル語訳金光明最勝王経である。[1] これをここでは一応レニングラード版と呼んでおくが、これが学界に知られてからすでに半世紀以上も経た今ごろになつて採り上げるのは、主として、つぎの二つの理由による。すなわち、まず第一に、我国の学界、とくに仏教学界において、本経の漢訳、モンゴル語・チベット語訳に比べて、そのウィグル語訳については、案外知られていないかに思われるからである。遅きに失する感はあるが、これに関して大体のことを紹介しておくのは、平生、些かウィグル語に接しているものとして、当然果しておくべき義務であろうと考える。つぎに、第二の理由として、以下のことがあげられる。さて、ここに問題にしようとするレニングラード版ウィグル語訳金光明最勝王経は、ラドロフによつて、その序文から第一四品の冒頭までがドイツ語に翻訳せられ、その死後、マーロフの手で、Suvarṇaprabhāsa (Das Goldglanz-Sutra), Aus dem Uigurischen ins Deutsche übersetzt von Dr. W. Radloff, I-III, Leningrad, 1930 (Bibliotheca Buddhica XXVII) として出版せられたが、ついで、一九四五年に、アンカラ大学のサアデト＝チャガタイ (Saadet S. Çagatay) 教授によつて、Altun Yaruk'tan iki parça, Ankara, 1945 (Ankra Üniversitesi Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Yayînlari No. 46, Türk Dili ve Edebiyati Enstitüsü No. 7)、つまり「金光明最勝王経の二つの章」と題して、その二章がトルコ語訳せられ、それが、最近、東洋文庫へ入つた。[2] サアデト女史のいわゆる「金光明最勝王経の二つの章」のうち、(1)一章は、サンスクリット語本ではその Vyāgirī,[3] 義浄訳金光明最勝王経ではその巻第十、捨身品第二十六の大部分に相当する箇所のウイグル語訳であるが、[4] (2)他の一章は、サンスクリット語本にも、[5] 義浄訳本にも、[6] またいわゆる合部金光明経にも見えておらず、[7] ただ、大正新脩大蔵経において、正倉院聖語蔵本から採録せられて、曇無讖訳金光明経の末尾に附載せられている、[8] 金光明経懺悔滅罪伝の大部分にあたるものであつて、レニングラード版では、第一巻（序[9] [suu]）のはじめに入れられている。つまり、(1)はもともと金光明最勝王経の一部をなすものであるが、(2)は、本来それには

ymä qutluγ öγtün uluγ t(a)vγač ilintä tayšin sivšin
また，幸ある 東方なる 大 シナ 国にて 大乘 小乘

alqu šastr-larïγ qamaγ nomlarïγ qalïsïz ötkürü toplu
すべての 論 を あらゆる 経 を 残りなく 理解し 完全に

bilmiš bošγunmïš bodistv gitsi samtso atl(ï)γ
知りたる，学びたる 菩薩 義浄 三蔵 という名の

ačari änätkäk tilintin tavγač tilinčä ävirmiš
阿闍梨がインド の言葉から シナ の言葉によつて 翻訳し，

yana bu kälyük bulγanyuq biš čöbik y(a)vlaq ödtäki
また この 来るべき 乱れたる 五 濁 悪 世なる

kinki bošγutluγ biš balïq-lïγ sïŋqu salï tutuŋ
後 学 ビシューバリクの Sïŋqu Salï Tutuŋ が

t(a)vγač tilintin ikiläyü türk tilinčä aqtarmiš
シナ の言葉から 再び チュルク の言葉によつて 飜訳せる

altun öŋlüg y(a)ruq yaltrïqlïγ qopda kötrülmiš (nom
金 色ある 光 明ある すべてに まされる 経

iligi atl(ï)γ nom bitig tükädi).
の王 という名の 経 書 完成せり．

とある。[28] しかし，何れにせよ，これらによつて我々は，レニングラード版の第11巻一第10巻，ベルリン版金光明最勝王経(の一部?)が，ビシュバリクの人，Sïŋqu Salï (Säli?) Tutuŋ によつて，義浄訳の金光明最勝王経からウイグル語に翻訳せられたものであることを知るのである。

ではつぎに，本経の，シナ語(?)・チベット語・サンスクリット語(以上第1巻〔序〕)，シナ語(第11巻一第10巻)からウイグル語に翻訳せられた各巻名称の内容は，大体において，サンスクリット語本[29]とともに，あとでのべるように義浄訳金光明最勝王経の第11巻一第10巻の各巻名品のそれに相応し，これらが，本来の金光明最勝王経に属するものであることは間違いないが，それでは，この第11巻一第10巻のウイグル語訳は，何人によつて行われたのであるか。これを示しているのは，レニングラード版第10巻の末尾，つまり，全巻の終りに附記せられたつぎの奥書である。[28]

ymä qutluγ öŋdün uluγ tavγač il-intä tayšiŋ savšiŋ
また，幸ある 東方なる 大 シナ 国にて 大乘 小乘

alqu šastïr-larïγ qamaγ nom-larïγ (qalïsïz) ötkürmiš
すべての 論 を あらゆる 経 を 残りなく 理解せる

bodistv gitso samtso atl(ï)γ ačari änätkäk til-intin
菩薩 義浄 三蔵 という名の 阿闍梨がインド の言葉から

tavγač til-inčä äv(irmiš)-(tä) yana bu biš
シナ の言葉によつて 翻訳し ? また この 五

čöbdik[29] kälyük bulγanyuq yavïz öγdä qolu-ta kinki bošγutluγ
濁の 来るべき 乱れたる 悪 世なる 後 学

biš baliq-lïγ sïŋqu salï tutuŋ tavγač tilin-tin
ビシューバリクの Sïŋqu Salï Tutuŋ が シナ の言葉から

türk uyγur tilinčä ikiläyü ävirmiš nom
チュルク ウイグル の言葉によつて 再び 翻訳せる 経

iligi sudur bitiyü tolu tükäl boltï.
の王 経． 書き 完 全 となつた．

盤無識漢訳本[17]、また、義浄漢訳本[18]、さらには、いわゆる合部金光明経[19]にもみえておらず、これまた、もともと、金光明最勝王経には属さないものと思われる[20]。つまり、レニングラード版の第一巻に序（suu）として収録されているものは、すべて、本来の金光明最勝王経の一部ではないのである。

ところで、これらのうち、㈠四天王讃の末尾に、

m(ä)n tanvasin ačari qumγan tutuŋ-nuŋ ötügi üz-ä
私 Tanvasin Ačari が Qumγan Tutun の 願い によって
tavišqan yïl bišinč ay-ïn töbüt til-intin uyγur
兎 年 第五の 月に、チベット の言葉から ウィグル
til-inga
の言葉に
äwirtim.
翻訳した。

とあるのによると、これは、Tanvasin Ačari (Tanvasin Ācārya, 「阿闍梨」) なるものが、Qumγan Tutun (「都統」[21]) の願によって、チベット語からウィグル語に翻訳したものであることがわかる。つぎに、㈡八大聖地制多（塔）讃の条には、

töz-ün ulu bayši nagarčuni üz-ä yaratïlmïš säkiz
尊き 偉大なる 師 Nagarčuni によって[22] 創られたる 八つの
ulu orun-lartaqï čaγïtlar-nïŋ ögdi-sin m(ä)n amoga
偉大なる 地 に在る 霊塔 の 讃 を 私 Amoga
siri ačari änätkäk tilintin türk uyγur
siri Ačari が インド の言葉から チュルク・ウィグル
tilinčä t(ä)qri burγan tormiš ud yïl-ïn törtünč
の言葉によって、天なる 仏陀 の生れし 牛 年に 第四の
ay tört y(ï)g(ï)rmi-ka aqdarïp öz qoturu
月 十 四(日)に 翻訳して 自ら 勧めの手で
tägindim.
捧りた。

とあって、これが、Amoga-siri Ačari (Amogha-śri Ācārya) によって、サンスクリット語からウィグル語に訳されたものであることを示している。これらに対して、この二つの讃の前、つまり序の冒頭に掲げられている金光明経懺悔滅罪伝については、これが、何人によって何語から翻訳せられたものであるか、それを示す明文はない。サアデト女史は、「巻末に附せられた記事から、これがチベット語からウィグル語に訳されたことがわかる」[23]といっているが、ここに同女史のいわゆる「巻末に附せられた記事」とは、私がさきに訳出した、㈠四天王讃の末尾にみえるもののことなのである。私は、この奥書は、ただ四天王讃にのみかかるものであって、その前の金光明経懺悔滅罪伝にまでかかるものではない、したがって、「Tanvasin Ācārya がチベット語からウィグル語に翻訳した」のは、ただ四天王讃だけである、と考える。金光明経懺悔滅罪伝は、別に触れるように[24]、滄州景城県人、温州治中張居道と、温州安固県丞の妻との物語であって、これがシナで創作されたものであることは間違いない。私は、このウィグル語訳は、そのシナ語原文から直接行われたのではないか、と思っているが、これについては、その翻訳者の名前とともに、確かなことはよくわからない。

このように、レニングラード版の第一巻に序として入れられているもののうち、金光明経懺悔滅罪伝については、確実なところは不明であるが、四天王讃は Tanvasin Ācārya によってチベッ

い。そこでつぎに、上の玄奘伝の翻訳の時期であるが、ガバイン女史はそれを、後唐時代（九二三―九三五）と考えているのに対し[35]、馮家昇はそれを、北宋時代においている[36]。私は、いま、これら両説を批判しうるに足る何らの材料をも持ちあわせぬので、しばらくこれらに従っておくが、そうすると、Singqu Sali (Säli ?) Tutuq は、一〇世紀二〇年代―一二世紀二〇年代の人物[37]であって、当面の金光明最勝王経（第二巻―第一〇巻）も、その間に訳経せられたということになろう。

以上、要するに、本経のウィグル語への翻訳者、訳経の時期、および原語は、つぎの如くである。

巻名	訳経者	時期	原語
第一巻（序）	金光明経懺悔滅罪伝	?	?	シナ語（?）
	四天王讃	Tanvasin Ācārya	卯歳五月	チベット語
	八大聖地制多讃	Amogha-śri Ācārya	丑歳四月一四日	サンスクリット語
第二巻―第一〇巻	Singqu Sali (Säli ?) Tutuq	一〇世紀―一二世紀	シナ語

四、写経者、および写経の時期

前節でのべたように、本経の第二巻―第一〇巻は、一〇世紀二〇年代から一二世紀二〇年代にいたるほぼ二〇〇年間の或る時期に、玄奘伝を翻訳したビシュバリクの Singqu Sali (Säli?) Tutuq その人によって、義浄訳金光明最勝王経からウィグル語に訳せられたのであるが、そうすると、ここに問題になってくるのは、ウィグル語訳玄奘伝におけるウィグル語と、同じくウィグル語訳金光明最勝王経の現本におけるそれとのあいだに若干の相異があるのは、如何に考うべきか、ということである。私は、ウィグル語訳玄奘伝の原本を見ていないので、ここではただ、ガバイン女史の説に従うより仕方がないが、同女史によると、これら二文献に用いられているウィグル語は、ただ Orthographie において異っているにすぎず、そしてこの相異は、両文献を後世になって写した写経者の Orthographie 乃至は Dialekt の特長に由来しているのであろうという[38]。

それでは、本経は、何人によって、何時写経せられたものであるか。この問題については、本経の幾つかの巻末に、それを示す奥書が附記せられている。すなわち、例えば、第一巻（序）の末尾に、

tay čin kuo kan[39] si y(i)g(i)rmi altïnč otčuq taqï
大 唐 国 跟 経 二十 六（年） 漸やる ?

oot qutlur taviγqan yïl kuu yi qu-a yixar-qa
火 の元猴の（丁）酉（卯） 年 十 一 月 寺 に

tayar-lïr bilgä talui šabi, ratna v(a)čir-niŋ ödügïnä
よれる bilgä Talui Šabi が、Ratna Vajra の 圖によって

tuŋ kuvan susar-tïnta onunč ay-y(i)g(i)rmi törtinč qutlur
燈 龕 の地 にて 第十の 月 の二十 四 幸ある

グル語への訳経は何時行われたか。これについては、まず、前に訳出したように、四天王讃は「兎年第五の月に、チベットの言葉から、ウィグルの言葉に」、また、八大聖地制多讃は「インドの言葉から、チュルク＝ウィグルの言葉によって、天なる仏陀の生れし牛年に、第四の月一四(日)に」、それぞれ翻訳せられた、とあり、その訳経の年の支、および月日だけは明示されているが、第二巻―第一〇巻に関しては、それさえもわからない。第一巻（序）の二つの奥書にみえる卯歳・丑歳が何時なのか、また、第二巻―第一〇巻が何時翻訳せられたのか、我々はこれらについて、レニングラード版の文献からは、何もいうことはできないのである。その原語も確定はできず（恐らくシナ語だろうとは推定されるものの）、その訳者については何一つ明かでない金光明経懺悔滅罪伝に関してはなおさらである。

ところが、ラドロフは、本経の訳経の時期について、ほぼつぎのようにいう。「本経に使われたウィグル語は、文法的にも、語彙的にも、八世紀・九世紀のマニ教文書におけるウィグル語にきわめてよく似てはいるものの、本経のウィグル語訳は、一三世紀乃至一四世紀よりはさかのぼらぬものである。これはウィグル族および東部チュルク族の文語であって、それは、八世紀―一〇世紀の間に完成され、その後、何の変化をも蒙らないで（口語は非常に変つたにも拘らず）、寺院で用いられてきたのである」[29]と。しかし、ラドロフが、本経の訳経の時期は、一三世紀或は一四世紀よりはさかのぼらぬとしたその理由については、かれは、明確なことは何もいっていないのである。

このように、ウィグル語訳金光明最勝王経の訳経の年代は、本経それ自身からは、これを決定することができず、ラドロフ説も一つの臆説にとどまるのであるが、我々は、この問題を考える一つの手がかりをもっている。それはほかでもない、本経（第二巻―第一〇巻）[30]の訳者として、第一〇巻の奥書に見えている Siŋqu Sali (Sali ?) Tutuŋ という名前である。

さて、今日、北京図書館とパリのギメ博物館 (Musée Guimet) とには、ウィグル語訳「菩薩大唐三蔵法師伝」が蔵せられているが[31]、その研究が、はじめガバイン女史、ついで馮家昇[32]によって発表せられた。私は、その原文は勿論、ガバイン女史の論文も、これを見ることができなかったので、いま姑く、AtG の Chrestomatie[33] の条に収められたもの、および、馮家昇の研究[34]に引用せられたものに拠ることにするが、それによると、その第二三葉に、

yana tavrač tilintin biš baliqlir siŋqu sali
また ヤナ の言葉から ビシュバリクの Siŋqu Sali
tutuŋ yaŋirdi türk tilinčä avirmiš bodistv
Tutuŋ が新しく チュルク の言葉によって 翻訳した 菩薩
tayto samtso ačariniŋ yoriγin uqitmaq atiγ tsi
大唐 三蔵 阿闍梨 伝 を 教えること という名の 慈
in čuin tigmä kawi nom bitig.
恩 伝 といわれる 詩 経 書。

とあって、この玄奘伝の訳者もまた、ビシュバリクの人、Siŋqu Sali (Sali ?) Tutuŋ であったことが記されている。この人物は、いま問題にしている金光明最勝王経（第二巻―第一〇巻）の訳者 Siŋqu Sali (Sali ?) Tutuŋ その人であると見て万誤りはあるま

といい、第七巻の末尾に、

biz bilgä talui šabi, ratna v(a)čir šabi-niŋ ötügiŋä
我等 Bilgä Talui Šabi, Ratna Vajra Šabi の願によって、
alïnč ay-nïŋ y(i)g(i)rmi törti-kün-i bitiyü tolu boltï.
第六の月の二十四日書き完成した

とある。これら数例によると、少くとも、第一巻(序)・第三巻・第四巻・第五巻・第六巻・第七巻の写経の年月日、写経者、寄進人、写経の場所は、次表の如くである。

巻数	写経の年月日	写経者	寄進人	場所
第一巻	康熙二六年(丁卯)一〇月二四日	Kuu-yi-qua 寺の Bilgä Talui Šabi	Ratna Vačir (Ratna Vajra)	敦煌
第三巻	康熙二六年一〇月二八日	Ratna Vajra Šabi	同人	〃
第四巻	康熙二六年八月一五日	Čaγšapat Maŋgal Toyïn	Iqiaŋ Isman, Ratna Vajra	〃
第五巻	(康熙二六年)六月六日	Čaγšapat Maŋgal Istavri Toyïn, Suvasti Toyïn, Bilgä Talui Toyïn	Iqiaŋ Isman, Ratna Vajra	敦煌・粛州・甘州あたり
第六巻	康熙二六年六月二二日	Suvasti Toyïn[45]		
第七巻	(康熙二六年)六月二四日		Bilgä Talui Šabi, Ratna Vajra Šabi	

上表によっても知れるように、第一巻・第三巻・第四巻・第六巻は、康熙二六年(一六八七)中の異った月日に写経せられているのであるが、年数を明示していない第五巻・第七巻もまた、同年の写経とみて誤りない。つまり、これらは、第五巻・第六巻・第七巻・第四巻・第一巻・第三巻の順序に、その写経が完了しているのである。そのほかの巻も、ほぼ同じころの写経であろう。

ところでラドロフは、すでに触れたように、本経で用いられているウィグル語が、その文法・語彙の観点から、八世紀・九世紀のウィグル文語に類似していることからみて、ウィグル文語が、八世紀―一〇世紀の間に完成し、それ以後は、全く何の変化をもうけないで(口語は非常に変ったけれども)、そのまま、寺院で使用されてきたことがわかる[46]、といい、マーロフは、従来は、ウィグル文字は、チュルク語を写すのに、一四世紀―一五世紀ごろまでしか使われなかったと考えられてきたけれども、本経が一六八七年に写経されていることからみると、そうではなくして、一七世紀末、いやさらには一八世紀初頭においても、ウィグル文字が、敦煌・粛州・甘州あたりのウィグル仏寺で盛に使われていたとせねばならぬ[47]、とのべている。さらにまた、サアデト女史は、上のマーロフ説を紹介したあとで、「この確認は、言語上、注目に値する。確かに一七世紀において、八世紀―九世紀のウィグル文語に忠実に従い、それをそのまま写したこと、個々の文字にいたるまで保存したことは、注目すべき事実である」といっている[48]。しかし、写経という特殊の現象だけから、果して、ラドロフ・マーロフのように断言し、サアデト女史の如く、それに重要な意味を附

kün üz-ä bitiyü tolu boltï. kinki töz-ün-lärkä ötüg
日 に 書いて 完成 した. 後の 貰きものたちに 願

bolşun saţu.
あれ. 善哉.

(10)
ここに 第三巻の末尾と

tay ciŋ kaŋ si alḍï otuz yïl üz-ä, irinč raḍna v(a)čir
大 清 康 熙 二十 六 年 に, 貧しき Ratna Vajra

šabi ärtmiš ög qaŋ-larïm oşγu qutrulγu üčün bu
Šabi が逝ける我が母 父たちの 救 済 のため この

üčünč kün-ni öz iligim üz-ä ürgäntük onunč
第三の 巻 を 自ら の我が手 によつて ? 第十の

(11)
ay-nïŋ y(i)g(i)rmi säkiz-i ačïlmaq qutluγ kün üz-ä
月の 二 十 八 「開かれる」 幸ある 日 に

bitiyü tägintim. tolu tükäl boltï.
書き 奉つた. 完 全 になつた.

ここに 第四巻の末尾と

bu törtünč tägşinč nom ärdinig irinč čaχšap(a)t maŋgal
この 第四の 巻 法 珠を 貧しき Čaχšapat Maŋgal

(12) (13)
toyïn, iqiaŋ isman raḍna v(a)čir ikägü-nüŋ
Toyïn が, Iqiaŋ Isman (と) Ratna Vajra 両 人の

ötügiŋä, sin taqïqu kün tolu boltï. kaŋ si y(i)g(i)rmi
願によつて, 辛 雞(酉) の 日 完成 した. 康 熙 二 十

alḍïnč yïl altïnč ay-nïŋ säkiz yaŋï-sï či tigmä
六 年 第六の 月 の 八 上旬, 「執」 といわれる

(14)
tutmaq kün sim sïčqan kün üz-ä bašlayu bitip säkişinč
「執る」 の日 辛 鼠(子) 日 に はじめて 書き, 第八の

ay-nïŋ ay tolun-ï biš y(i)g(i)rmi-sintä bitiyü tolu qïldïm.
月の 月 満てる 十 五 (日) に 書き 完全 にした.

ここに 第四巻の末尾と

ymä buši idiz-i süşük köŋül-lüg ratna v(a)čir iqiaŋ
また 布施 高き(?) 浄き 心 もてる Ratna Vajra と Iqiaŋ

isman ikägü-nüŋ kirtgünč-iŋä, altun öŋlüg y(a)ruq-luγ
Isman 両人の 信心 により, 金 色 の 光 ある

nom ärdinig ötünmäk üz-ä irinč č(a)χšap(a)t maŋgal
法 珠を 願う ため, 貧しき Čaχšapat Maŋgal

toyïn bišinč ay-nïŋ y(i)g(i)rmi iki-si, ki toŋuz, či
Toyïn 第五の 月 の 二 十 二(日), 己 豚(亥), 「執」

tigm-ä tutmaq kün qamaγ binsun tïnl(ï)γ-lar
といわれる 「執る」 の日, あらゆる ? 生物たち

sïγ-ïŋa yaγïz-qa inär kün üz-ä tuŋ kuvan balïq-ta
の利益に, 地 に 入る 日 に, 敦 煌 の町で

ratna v(a)čir-niŋ äv-intä biz č(a)χšap(a)t maŋgal isḍavri
Ratna Vajra の 家で 我等 Čaχšapat Maŋgal Istavri

toyïn, suvasḍi toyïn, bilgä talui toyïn üčägü bašlayu
Toyïn, Suvasti Toyin, Bilgä Talui Toyïn 三人が はじめて

bititük, yana altïnč ay-nïŋ altï yaŋï-sï sim sïčqan ymä
書き, また 第六の 月の 六 上旬, 辛 鼠(子), また

či tigm-ä tutmaq kün üz-ä ymä isḍavri toyïn
「執」 といわれる「執る」の日 に, また Istavri Toyïn が

bišinč kün nom-uγ bitiyü tolu qïltïm.
第五の 巻 経を 書き 完全 にした.

ここに 第六巻の末尾と

kaŋ si y(i)g(i)rmi altïnč yïl altïnč ay-nïŋ y(i)g(i)rmi
康 熙 二 十 六 年 第六の 月の 二 十

iki-si kün üz-ä alḍïnč bölügün bitiyü tolu boltï. irinč
二 日 に 第六の 巻を 書き 完成 した. 貧しき

suvasḍi toyïn. ötüg bolz-un. ädgü toyïn-lar-qa.
Suvasti Toyïn. 願 あれ. 善き 僧たちに.

る。

第四巻では、第一葉—第五〇葉、第五三葉—第七四葉が残っており、第五一・第五二の二葉が脱けている。これは、義浄訳本巻第四、最浄地陀羅尼品第六に相当するのであるが、その標題は、ウィグル語では、73 b. 22-26 に、

arïγ yir orun-lar sayuqi d(a)rmi tigm-ä tutyaq (52)

浄き 地 場所 すべてなる 陀羅尼 といわれる 総持すべき

nom-larïγ bodi tigm-ä tuyunmaq köŋül-üg uqïtmaq

教えを、菩提 といわれる まとる 心を、教えること

at(i)γ altïnč bölüg törtünč tägsinč.

という名の 第六の 章 第四の 巻。

と訳せられている。

第五巻は三〇葉から成り、きわめてよく保存せられているが、ただ、第三・第四の二葉のみ、少し脱けている。

この巻は、五章を含む。すなわち、義浄訳本巻第五、蓮華喩説品第七は、la. 6-9 に、

linγu-a čačak yüläšürki (54) tüz-ä ögmäk at(i)γ

蓮華 花 に喩えること によって 譬えることという名の

yitinč bölüg bišinč tägsinč.

第七の 章 第五の 巻。

と、義浄訳本巻第五、金勝陀羅尼品第八は、6a. 6-7 に、

tuŋ altun d(a)rmïγ uqïtmaq at(i)γ

すぐれたる(?) 金の 陀羅尼を 教えること という名の

sak(i)šinč bölüg.

第八の 章。

と、義浄訳本巻第五、重顕空性品第九は、9b. 20-21. に、

yoq qurγ töz-in uqïtmaq at(i)γ toqz-unč bölüg.

無 空 の本性を 教えること という名の 第九の 章。

と、義浄訳本巻第五、依空満願品第十は、14a. 20-22 に、

yoq qurγ töz-inä (53) tayanip küz-ätmiš kïsïš-ïg qanturmaq

無 空 の本性に 依つて 願つた 願いを 満たすこと

at(i)γ onunč bölüg.

という名の 第十の 章。

と、それぞれ題する各章におさめられているが、義浄訳本巻第五、四天王観察人天品第十一の標題は、27 b. 20-21 に、

törт m(a)γaranč t(ä)ŋri-lär t(ä)ŋri yalaŋuq quvraγ-ïn

四人の 大王 天たちが、 天 人 の集団を

kör-mäk at(i)γ bir y(i)g(i)rminč bölüg.

観ること という名の 第十 一 の 章。

と、30 a. 18-20 には、

törт maxaranč t(ä)ŋri-lär t(ä)ŋri yalaŋuq quvraγ-ïn

四人の 大王 天たちが、 天 人 の集団を

kümäk at(i)γ bir y(i)g(i)rminč bölüg bišinč

保護すること という名の 第十 一 の 章 第五の

tägsinč.

巻。

と、それぞれウィグル語訳せられている。マーロフがこの章を「四人の天のマハラージャによって、天界の人と人間との集団が保護せられること」と訳しているのは、(56) 前掲の二標題のうち後者を採ったからであり、サアデト女史はこれに賛成しているが、(57) これは、漢訳の四天王観察人天品にあたるものであるから、むしろ前者をとり、kümäk (「まもる、保護する」) は körmäk (「観る、見る」) の誤りとすべきであろう。

してよいか、どうか、些か疑問のように思われる。何となれば、経文を写す際用いられる言語・文字が、現実に生きている文語のそれらと必ずしも一致するとは限らぬことは、いまさらいうまでもないからである。

五、形式と内容

マーロフの序文[49]によると、本経は、丈夫な黄色の紙に写され、一葉（60×23㎝）には、平均、二二行―二五行含まれ、字は大きく、崩されてはいないという。今日残っている限りの、各巻の第一葉（ただし、第一巻〔序〕はのぞく）の冒頭の上部には、台座に座した仏像のミニアチュールがあり、それにはチベット文字の署名が施されている。また、或る一定の語（例えば、各章〔品〕の標題、固有名詞、burgan〔仏陀〕という語、そのほか）は朱書せられているが、それらは、レニングラード版の出版に際して、左側に附した点線で示されている。

つぎに、レニングラード版金光明最勝王経の各巻、各章の標題を訳出して、義浄訳本の各巻、各品のそれと対照し、もつて、内容の紹介に代えることにしたい。

ところで、すでにのべたように、suu（序）と題せられたレニングラード版の第一巻（1.1b.1.18b.）には、もともと、金光明最勝王経には属さない、金光明経懺悔滅罪伝・四天王讃・八大聖地制多（靈塔）讃が含まれている。したがつてこの巻は、義浄訳金光明最勝王経巻第一に入れられた序品第一・如来寿量品第二とは合致しない。本巻、とくにその金光明経懺悔滅罪伝については、別に紹介文を用意しているので[50]、ここでは、詳しくは論じない。

これにつづく第二巻―第一〇巻が、すでに触れた如く、本来の金光明最勝王経であつて、義浄訳本からウィグル語訳せられたものなのであるが、まず、第二巻は四八葉をのこし、そのうち第一葉・第二〇葉―第四八葉は闕文が多く、また、末葉が闕けている。

このうち、義浄訳本巻第二、分別三身品第三に相当する部分は、標題の部分が闕けているが、この章については、最近、シナスィ＝テキン（Sinasi Tekin）博士が研究を発表した[51]。

第二巻第四章は、その29b. 6-7に見えるように、

til-tä	altun	köyrüg	körüp	kšanti	qil-maq	(törtünč)
誓で	金の	太鼓	を見て	懺悔	する	（第四の）
bölüg						
章						

と題せられ、これは、義浄訳本巻第二、夢見金鼓懺悔品第四にあたる。

第三巻には、三七葉あるが、第一葉と第三葉とが闕けている。この37a. 9-14に、

(52)						
qilinč	artatmaq-in	öčürmäk	al(i)r	nom	yörügin	
行為	の障害(?)を	滅ぼすこと	という名の	法	の教を	
uqitdači	bišinč	tüš	bölüg	üčünč	tägz-inč	nom bitig
教える	第五の	部	章	第三の	巻.	経 書
bitiyü	yadilti.					
書き	配られた.					

とあるように、これは、義浄訳本巻第三、滅業障品第五にあた

(ai) いる。ただし、こまかい点で、レニングラード、ベルリン両版のあいだには、相異があるようである。上掲両章の sirigini は Śrī と関係があり、第一七章の qut t(ə)ŋri qadun-ï は、その Śrī の意味を訳して、sirigini とならべたものであろう。

つぎの第一八章は、その 16a. 13-15 にみえるように、

vasuntari atl(ï)γ yir qatunï ötüg ötünmäk
Vasuntari という名の 地 女(神)が 祈りを 祈ること

atl(ï)γ säkiz y(i)g(i)rminč bölüg.
という名の 第十 八 の 章.

と題せられており、これが義浄訳本巻第八、堅牢地神品第十八にあたるものであることはいうまでもない。ただし、堅牢地神のサンスクリット名は、Dṛḍha-pṛthivi-devatā であるから、ウィグル訳の vasuntari とは一致しない。この vasuntari が何を写したものであるか、博雅の御教示を得たい。

さらに、義浄訳本巻第八、僧慎爾耶葉叉大将品第十九は、ウィグル訳では、21b. 4-7 に見える如く、

sančanačavi atl(ï)γ t(ə)ŋri-lär uruγuï ötüg ötünmäk
Sančanačavi という名の 天 たちの 将軍が 祈りを 祈ること

atl(ï)γ toquz y(i)g(i)rminč bölüg.
という名の 第十 九 の 章.

の名でおさめられている。sančanačavi が、僧慎爾耶のサンスクリット原名、Sañjñeya の不完全な音訳であることはほぼ確かである。

義浄訳本巻第八の最後の品名は、正法正論品第二十であるが、ウィグル語訳本（レニングラード版）では、それにあたると思われる第二〇章は、25b. 9-11 に見える、

ilig-lär qan-lar-nïŋ köni törü-sin aymaq atl(ï)γ
王たち ハン たちの 正 法 を のべること という名の

y(i)g(i)rminč bölüg.
第二十 の 章.

という標題と、38 b. 13-18 に見える、

rača šastir tigm-ä bäglär törü-sin uqïtmaq atl(ï)γ
Rača Šastir といわれる 公たち の法を 教えること という名の

y(i)g(i)rminč bölüg. sak(ï)šinč täginč. biiyü oqïyu
第二十 の 章. 第八の 巻. 註き 読みて

yadïlï.
配られたり.

という名前のもとに、おさめられている。ウィグル語の rača は rāja (H) の、また šastir は śāstra (論) の、それぞれ音訳である。

第九巻では、第一葉から第八葉までと、第二一葉から第三一葉までとが存在し、第九葉より第二〇葉に至る各葉は闕けている。第二一章は、義浄訳本巻第九、善生王品第二十一にあたるが、その標題は、1b. 6-9 に見える如く、

sučadi atl(ï)γ ilig qan-nïŋ tilur-in uqïtmaq atl(ï)γ
Sučadi という名の 王 ハン の 因縁を 教えること という名の

bir otuz-unč bölüg.
第二十一 の 章.

である。善生王のサンスクリット名は、Susambhava であるが、ウィグル語訳では sučadi になっている。これは、或いは、Sujāta または Sujāti の音訳でもあろうか。

第二二章は、その 6b. 18-20 に示されているように、

第六巻は三〇葉から成り、そのうち、第1・第一〇・第二一の三葉は欠けている。この標題は、30 b. 11–15 に、

tört maγaranč t(ä)ŋri-lär yirtinčüg küşätmäk atl(ï)γ
四人の 大王 天 たちが 世 を 保護すること という名の

iki y(i)g(i)rminč bölüg al(t)ïnč tägz-inč bitiyü oqïyu
第十 二 の 章 第六の 巻. 書き 読みて

yadïl-dï.
配られたり.

と見えているが、これは、義浄訳本巻第六、四天王護国品第十二をウイグル語訳したものにはかならない。

第七巻は、一〇葉から成っていて、その第1葉が欠けている。本巻は、三章を含む。まず、第1三章の標題はレニングラード版には欠けているが、これは、ベルリン版には存在し、ミュラーによって、つぎのように写されている。(68)

(69)
il(in)m(äk)siz tigmä darnï nomuγ uqïtmaq
執着することなし、といわれる 陀羅尼の教えを 教えること

atl(ï)γ üč y(i)g(i)rminč bölüg yitinč tägzinč.
という名の 第十 三 の 章 第七の 巻.

これが、義浄訳本巻第七、無垢浄光大陀羅尼品第十三の翻訳であることはいうまでもない。

つぎに、義浄訳本巻第七、如意宝珠品第十四にあたる第1四章の標題は、その 4a. 7–9 に、

čintamani atl(ï)γ d(a)rnï nom-uγ uqïtmaq atl(ï)γ
如意宝珠 という名の 陀羅尼の教えを 教えること という名の

tört y(i)g(i)rminč bölüg.
第十 四 の 章.

と、また、義浄訳本巻第七、大弁才天女品第十五之1、巻第八、同品第十五之二にあたる第1五章の標題は、その 8 a. 12–14 に、

sarasvati atl(ï)γ t(ä)ŋri qïz-ï ötüg ötünmäk atl(ï)γ
Sarasvati という名の 天 女が 祈りを 祈ること という名の

biš y(i)g(i)rminč bölüg.
第十 五 の 章.

と、それぞれ訳せられている。sarasvati が Sarasvatī (大弁才天) の音訳であることは、いうまでもない。

つづく第八巻は三八葉から成り、そのうち、第1葉・第二六葉―第二八葉・第三〇葉が欠けているが、第二七葉後半から第二八葉前半に至る箇所は、ベルリン版には在り、ミュラーによって翻訳せられている。(69)

この第八巻には、五章が含まれている。まず、義浄訳本巻第八、大吉祥天女品第十六は、その8 b. 18–20 に見える、

sirigini atl(ï)γ t(ä)ŋri qïz-ï ötüg ötün-mäk atl(ï)γ
Sirigini という名の 天 女が 祈りを 祈ること という名の

altï y(i)g(i)rminč bölüg.
第十 六 の 章.

という、また義浄訳本巻第八、大吉祥天女増長財物品第十七は、その 11 b. 8–11 に見える、

sirigini qut t(ä)ŋri qaḍun-ï äd tavar-ïγ üstämäk atl(ï)γ
Sirigini 吉祥 天 女が 財 物 を 増すこと という名の

yiti y(i)g(i)rminč bölüg.
第十 七 の 章.

という、それぞれの標題のもとにおさめられているが、この両章の1部は、ベルリン版にも存在し、ミュラーによって訳出せられて

ついて、「入手の経過」、「訳経者とその訳経の時期・原語」、「写経者とその写経の時期」、「大体の形式と内容」に分けて紹介してきた。つぎに問題とせらるべきは、本経の訳経者、とくに Singqu Sali (Sali ?) Tutung が、翻訳にあたってどのような態度をとったか、また、かれらは、原経を、従ってまた仏教教理を、どの程度理解していたか、などであろう。しかしこの問題は、原経とそのウィグル語訳本とを、その一つ一つの字句に即して、詳細に比較検討した上でなければ、これに答えることはできない。さきに触れたように、シナスィ博士は、「分別三身品」(skr. trikaya, uig. tükätti) の翻訳から、これを考えようとしているが[62]、未だ必ずしも十分とはいい難い。私もまた、本稿で、金光明経懺悔滅罪伝と、そのウィグル語訳とを比較検討して、上の問題を考え、あわせて、サアデト女史の業績を紹介・批評するつもりであったが、与えられた紙数が尽きた。これについては、別に機会をみて、発表したいと思っている。[63] 以上はただ、そのための予備作業として行った、きわめて大雑把な紹介にすぎない。

末筆乍ら、サンスクリット語その他につきいろいろ御教示を賜った平川彰教授に、ここで御礼を申上げておきたい。

—一九六二・七・一〇—

註(1) ただし、原文をウィグル活字に写す際、相当の誤読があったようである。以下、この書を、RM と略称する。

(2) 以下、Saadet と略称する。

(3) Nanjio, B. & Idzumi, H., The Suvarṇaprabhāsa Sūtra, A Mahayana Text called "The Golden Splendour." Kyoto, 1931. 以下、Idzumi と略称する。

(4) 大正新脩大蔵経、第十六巻経集部三、四五〇頁—四五四頁。

(5) Idzumi, op. cit.

(6) 上掲大正新脩大蔵経、四〇三頁—四五六頁。

(7) 同上書、三五九頁—四〇二頁。

(8) 同上書、三五八頁。

(9) これは、或いは sü̈ であるかも知れぬ。Gabain, A. von, Alttürkische Grammatik, Leipzig, 1950, S. 335. 以下、AtG と略称する。

(10) 以下、Malov, Pamyatniki と略称する。

(11) RM, str. I-II; Malov, Pamyatniki, str. 139-140.

(12) ガベイン女史がサアデト女史に語ったところによると、ベルリンのアカデミーには、八部存在し、或るものは一〇葉、或るものは七〇—八〇葉から成っているという。Saadet, s. 4. また、Rahmeti, R., Türk Dili üzerinde araştırmalar, Istanbul, 1936. 参照。

(13) Müller, F. W. K., Uigurica I, Berlin 1908.

(14) Bang, W. & Gabain, A. von, Uigurische Studien, Ung. Jb., Bd., X, Berlin, 1930. また、AtG の Chrestomatie の条にも、本経から幾つかの部分が採録され、ローマ字に転写せられている。

(15) 例えばラドロフは、ベルリン版の方がレニングラード版よりもより早い時期に属するといっている。RM, str. XIV.

t(ä)ŋri-lär yak-lar kūṣätmäk atl(ï)γ iki
天 たち 衆又たちが 保護すること という名の 第二十
otuz-unč bölüg.
二 の 章.

であるが、これは、義浄訳本巻第九、諸天衆又護持品第二十二に相当する。

これにつづく、義浄訳本巻第九、授記品第二十三と、同巻、除病品第二十四とにあたる標題は脱けているが、同巻、長者子流水品第二十五は、27 b. 8-10 に、

udaka isandi uri-nïŋ iš-in kötügin uqïtmaq
Udaka Isandi 息子(男子)の 仕事を 教えること
atl(ï)γ biš otuz-unč bölüg.
という名の 第二十 五 の 章.

と見えている。本章のサンスクリット名は、Jalavāhanasya-matsya-vaineya であるが、ウィグル語では上のように、udaka-isandi になっている。これは、灌水を意味する udakaśānti の音訳ではないであろうか。

最後の第一〇巻は、第一葉から第四葉までは脱けているが、第五葉以下は第三十九葉の末葉にいたるまで、保存せられている。

本巻は、六つの章から成る。第二六章は、義浄訳本巻第十、指身品第二十六に相当し、この章の大部分は、すでにのべたように、サアデト女史とマーロフとによって、それぞれトルコ語とロシア語とに翻訳せられたが、その標題は、レニングラード版には脱けている。つぎに、義浄訳本巻第十、十方菩薩讃歎品第二十七、同巻、妙幢菩薩讃歎品第二十八、同巻、菩提樹神讃歎品第二十九、同巻、

大弁才天女讃歎品第三十、同巻、付嘱品第三十一は、それぞれ、

ondïn sïŋar-qï bodistv-lar t(ä)ŋri t(ä)ŋri-si burγan(-ïγ
十 方にある 菩薩たちが 天 中の天 仏陀を
ögmäk atl(ï)γ yïti) otuz-unč bölüg. (23 b. 20-22)
讃えること という名の 第二十 七 の 章.

sumakïti bodistv t(ä)ŋri t(ä)ŋri-si burγan-ïγ ögmäk
Sumakïti 菩薩が 天 中の天 仏陀を 讃えること
atl(ï)γ säkiz otuz-unč bölüg. (26 a. 12-14)
という名の 第二十 八 の 章.

bodi sögüt t(ä)ŋri-si t(ä)ŋri t(ä)ŋri-si burγan-ïγ ögmäk
菩提 樹 神が 天 中の天 仏陀を 讃えること
atl(ï)γ doquz otuz-unč bölüg. (28 a. 10-12)
という名の 第二十 九 の 章.

sarasvati t(ä)ŋri qïz-ï t(ä)ŋri t(ä)ŋri-si burγan-ïγ
Sarasvati 天 女が 天 中の天 仏陀を
ögmäk atl(ï)γ otuz-unč) bölüg. (30 a. 20-22)
讃えること という名の 第三十の 章.

bu nom ärdinig tutuşmaq atl(ï)γ bir qïrqïnč
この 法 珠を 付与すること という名の 第三十一の
bölüg. (32 a. 14-16)
章.

として、ウィグル語訳せられている。これらのうち、sarasvati は Sarasvatī(大弁才天)の音訳として問題ないが、妙幢菩薩(Ruci-raketu bodhisattva)をどうして sumakïti と訳したのか、いまの私にはわからない。これまた、御教示を乞いたいことの一つである。

以上、私は、レニングラード版ウィグル語訳金光明最勝王経に

何の訳語も附しておられぬが、これは、kuo で、その前の tay čïŋ (大清) につづき、大清国の「国」を音訳したものではないだろうか。前註(35)所引、Gabain, Alttürkische Datierungsformen, S. 203.

(40) s で写された z, t で写された d は、それぞれ、s, t の下に点を附してあらわした。そのほかもこれに準ずる。

(41) この奥書の前半、bolti までは、ガバイン女史によってローマ字に転写されている。AtG, S. 259. 原文には avqian とあるが、これは、つぎに掲げる第五巻奥書にみえる iqiag であると思われるので、ここでは、iqiag と写しておく。

(42) 原文には、ここでは ismin とあり、第五巻では isman とある。一応、第五巻に従うことにする。

(43) tutmaq とは、建除十二神 (建・除・満・平・定・執・破・危・成・収・開・閉) の第六、「執」にあたる。či はその音訳であり、tutmaq (取る、つかむ、執る) はその意訳にほかならない。補註(一)の「開かれる」日とは、同じく建除十二神の「開」にあたるのであろう。

(44) 以上は偶目したかぎりの数例をあげたにとどまる。

(45) この人物はまた、寄進人でもあるかもしれぬ。

(46) RM, str. XIV-XV.

(47) RM, str. III-IV; Malov, Pamyatniki str. 140.

(48) Saadet, s. 3.

(49) RM, str. VII-VIII; Malov, Pmayatniki, str. 141-142.

(50) 前註(24)参照。

(51) Sinasi Tekin, Über die buddhistische Trinitätslehre in der uigurischen Version des Goldglanz-Sūtra, Ural-Altaische Jahrbücher, Bd. XXXIII, Heft, 1-2, 1961.

(52) 原文には、atartmaq とある。atartmaq では意味が通じにくいので、一応、artatmaq と写したが、これでも、充分には理解しかねる。御教示を俟つ。

(53) 原文には、tutruq とあるが、ここでは一応、tutyaq と訂正しておく。tutyaq は Festhalten, Haften を意味し、dhāraṇī のもつ「総持」の意に相応するからである。AtG, S. 345.

(54) yülüšürki は、あるいは、yülašürkü, yülašürgü の誤りかとも思われる。

(55) 原文には、töz-iŋi とあるが、これは、töz-iŋä の誤りである。

(56) RM, str. XI.

(57) Saadet s. 8.

(58) Müller, Uigurica I, S. 11.

(59) ミュラーは、これを、oqïtmaq と読んでいる。oqïtmaq (読ませる) でも意味は通じるが、本稿では、すべて、uqïtmaq (理解させる、教える) によって統一した。

(60) Müller, Uigurica I.

(61) Müller, ibid.

(62) 前註(51)参照。

(63) 前註(24)参照。

補註 (一) 前註(43)参照。

しかし、この問題は両版本をより厳密に比較検討した上で、答えらるべきであろう。

(16) Idzumi, op. cit.

(17) 前掲大正新脩大蔵経、三三五頁—三五八頁。

(18) 同上書、四〇三頁—四五六頁。

(19) 同上書、三五九頁—四〇二頁。

(20) 大正新脩大蔵経、第三二巻論集部全、七七三頁には、仏説八大霊塔名号経が収録されているが、これは、内容的にも、形式的にも、ウイグル語訳八大聖地制多（霊塔）讃と異っているようである。

(21) Müller, Uigurica I, S. 14; 馮家昇、回鶻文写本「菩薩大唐三蔵法師伝」研究報告（考古学専刊丙種第一号、中国科学院、一九五三）、五頁。

(22) 西蔵大蔵経では、八大聖地制多讃（仏説八大霊塔名号経）は、Nāgārjuna（竜樹）の作ということになっている。ウイグル語訳にみえる nagarčuni が Nāgārjuna の音訳であることはいうまでもない。

(23) Saadet, s. 12.

(24) 拙稿、ウィグル語訳金光明経懺悔滅罪伝について（未発表）。

(25) Idzumi, op. cit.

(26) これと類似の奥書は、また、レニングラード版第四巻の終りにもみえ、これは、AtG の Chrestomatie の条に採録せられている。AtG, S. 259.

(27) ここには čöbdik とあるが、これは、第四巻の奥書や、後掲のベルリン版のそれに見える如く čöbik の誤りであろう。bis čöbik kälyük bulγanyuq については、Müller, F. W. K., Uigurica II, Berlin, 1911, S. 91 参照。

(28) Müller, Uigurica I, SS. 13-14.

(29) RM, str. XIV-XV.

(30) および第四巻の奥書、前註(26)参照。

(31) Gabain, A. von, Die uigurische Übersetzung der Biographie Hüen-tsangs, V. Kap., SBAW., 1935, SS. 151-180; ditto., Briefe der uigurischen Hüen-tsang Biographie, SBAW., 1938, SS. 371-415.

(32) 前註(21)所引、馮家昇、回鶻文写本「菩薩大唐三蔵法師伝」研究報告。

(33) AtG, SS. 258-259.

(34) 前註(32)所引論文、四頁。

(35) 前註(31)所引論文、とくに前者、および、Gabain, A. von, Alttürkische Datierungsformen, Ural-Altaische Jahrbücher, Bd., XXVII, Heft, 3-4, S. 200.

(36) 前註(32)所引論文、八頁—一二頁。

(37) マーロフが本経の訳経の時期を一〇世紀と断定しているのは、ガバイン説に従ったからでもあろうか。Malov, Pamyatniki, str. 140.

(38) Saadet, s. 4.

(39) ガバイン女史は、ここを kuu kaŋ si と読み、kuu とは

Vol. LXXI September 1962 No. 9

SHIGAKU-ZASSHI

(THE HISTORICAL JOURNAL OF JAPAN)

Articles *Page*

Matsui, S., Szechwan in the First Half of T'ang Period 1
—Mainly on the Relationship between T'ang *lü-ling* Government and the Native Powerful Families of the Province—

Notes

Itō, T., A Study of "*Murakagami*" 邑鑑 concerning the Domain of *Gamô* 蒲生, Feudal Lord of *Aizu* 会津 38

Kuroha, S., On the "Nunobiki-maru" Incident 51

Documents

Mori, M., A Note on *Suvarṇaprabhāsa* in Uighur Version 66

Aspects

Togawa, T., Recent State and Trands of Study in Russian History in the U. S. (二) 82

Reviews

Komai, K., Yoshida, S. "斐太 —新潟県新井市の弥生聚落址—" (HIDA—Yayoi Period Dwelling Sites at Arai City Niigata Prefecture—) .....by J. Shimizu.. 97

Heissig, W., "仏典蒙訳史の研究" (Beiträge zur Übersetzungsgeschichte des mongolischen buddhistischen Kanons.) .....by H. Okada.. 102

EDITED
BY
SHIGAKU-KAI
(THE HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN)
Faculty of Letters
University of Tokyo

昭和37年9月15日 印刷
昭和37年9月20日 発行 定価 150 円
(第71編第9号)
東京都文京区 東京大学文学部内
編集者 史学会 代表者 村川堅太郎
電話 小石川(812)2111 内線2363
振替口座 東京35022番

発行者 東京都千代田区神田美土代町20 野沢繁二
印刷者 東京都新宿区東五軒町35 寄原十郎
発行所 東京都千代田区神田美土代町20 株式会社山川出版社 電話(231)1830振替東京43993

IBM 4217

11852